町史とっておきの話 306

〝書物の郷〟只見町での書物調査フィールドワーク④

―医師・原田了玄の書物から見る医師修業と武士批判の精神―

早稲田大学非常勤講師
久野俊彦

黒谷家の医家・原田家の医師修業

原田家（原田拓夫家）の初代原田重長（一六一四～一六八七）が会津若松から黒谷村に入り、二代玄貞（一六五〇～一七二三）から医師となりました。三代幽玄（一六九〇～一七七九）と四代了玄（一七二〇～一七九七）は、会津地方を遍歴した僧医の如活（一六六六？～一七四一）の門弟でした。また、了玄は越後国長岡藩の藩医である橋本幸庵のもとで、高度な医師修業をしました。

江戸時代の医師修業は、手習いを修得した後、①近隣の町や村の医師の弟子となって医学の初歩を学ぶ、②その後、より高度な技術を習うために近くの都市の医学塾で鍛錬する、③さらに、江戸・京都・大坂・長崎の先進地へ遊学して修学する、という医師修業の三つの型がありました。三代幽玄は①型の医師で、四代了玄は②型の医師でした。了玄の門弟である下山村（南会津町）の馬場順平は、京都の高名な医師である中西深斎（一七二四～一八〇三）の門人となった③型の医師でした。

幽玄・了玄が学んだ医学は、中世から近世中期まで主流であった金元医学（後世方派医学）です。金元医学は医学・経絡（鍼灸のツボ）・運気論・陰陽五行説・儒学・易学・占術を学びました。馬場順平が京都で学んだ古方派医学は、近世中期に起こった当時最先端の論理的医学でした。

▶『十四経備考』（鍼灸のツボ 一七四六年 原田了玄写）

了玄の豊かな学識

了玄は寛保二年（一七四二）から寛政四年（一七九二）の間に、三十四点の医学書や詩文等を書写しています。弟子は師から医術を学んで伝授を受け、秘伝の書物の書写を許されて書物が伝授されました。長岡藩医の橋本幸庵が了玄に伝授して、了玄が書写した写本があります。橋本幸庵は江戸に遊学して、儒学者藤原惺窩の門流である山岡雲南に学びました。了玄は藤原惺窩の門弟である林羅山の易書を橋本幸庵から伝授されています。了玄の学識は儒学・易学に加えて神道にも及んでいました。『神皇正統記　只見本』が原田家に伝来していたのは、了玄が瀧泉寺から借りて読んでいたからだと考えられます。

山野の文人・了玄の「八景」づくり

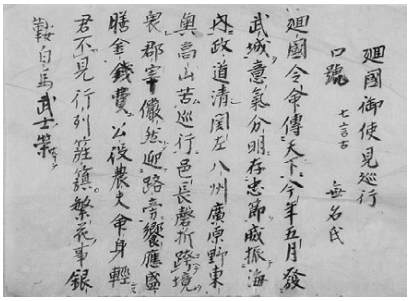
了玄は登山を好み漢詩を詠む山野の文人でした。松山村（昭和村）の文人絵師である佐々木松夕（一七二二～一八一七）と親交がありました。了玄の漢詩の題材は、現在の昭和村・金山町・只見町・南会津町に及んで、「野尻組八景」「沼沢八勝」「大石八景」「唱崎八景」「虻宮十二景」を詠んでいます。「八景」とは中国の「瀟湘八景」になぞらえて、ある地域で八つの景勝を見出していくことです。了玄は奥会津を旅して山に登り、八景として示して新たな名所を発見していきました。

武士批判をする了玄の自由な精神

了玄の漢詩は、天明八年（一七八八）の幕府廻国巡見使への批判にも及んでいます。無名氏の口号（叫び）と書かれた了玄作と考えられる七言古詩「廻国御使見巡行」を口語訳で紹介します。

「巡見使が江戸から来て、天下に威勢を示し、村人と代官は畏まって迎えた。村人は豪勢な饗応を負担させられ銭は費えた。労役にかりだされた村人の身や生活は軽んじられた。村人はみな見たよ、幕府の旗を立てた華美な大勢の巡見使、威厳を見せつける銀の鞍の白馬に乗る武士の栄えが、無法な奢りであることを。」

巡見使に随行した古川古松軒の『東遊雑記』によると、総勢百十八人の巡見使は五月六日に江戸を出発し、下野国から会津若松・田島（南会津町）・古町（南会津町）を経て、十九日に布沢（只見町）、二十日に野尻（昭和村）に止宿しました。六十八歳の了玄は村人の一人として憤り、この詩をひそかに作成していました。江戸時代の村人は、武士に支配されていたとはいえ、心まで支配されていたわけではないのです。豊かな学識と自由な精神を持った村人が、只見にはいました。



▲『「廻国御使見巡行」（1788年 原田了玄作）